

コラム

夫唱婦随

高木兼寛は明治8年から5年間英国に留学したが、その留学で切実に感じたのは、日本国民の民度が著しく低いことであった。帰国したらぜひその基礎になる衣食住を洋風（英国風）に改めねばならないと考えた。彼はまず、衣食住の改善には夫人たちの協力が是非必要であるという考えから、海軍軍医の夫人を会員とする「愛生社」という親睦会を結成した。それは兼寛夫人・富子を会長とし、実吉安純、豊住秀堅ら兼寛一党の夫人を幹部とする全海軍軍医夫人の会であった。毎月一回兼寛宅で開かれる会合では、兼寛も加わって、西洋の婦人の交際の仕方や、礼儀作法、衛生上のこと、子供の教育のことなどについて講義をした。そのうち社交ダンスの稽古や洋食のマナーなどの講習も行うようになり、会場も芝公園の水交社を使うようになった。

そのころ政府も西欧化をすすめるために、その運動の中心になる建物・鹿鳴館を完成した（明治16年）。これは日本人の生活を西欧化し、外国人との交際を密にするための社交場であった。この建設には兼寛もいささか貢献したが、さらに彼は貴族や軍人たちを組織し、これに愛生社を加えて「鹿鳴会」なる会を興した。この鹿鳴会では、夫人たちは洋装して出席し、さかんに夜会、舞踏会、仮装などをおこなった（鹿鳴館時代）。兼寛夫妻もこれら催物を大いに楽しんだ。はじめ夫人たちは、このような欧化主義運動には、あまり積極的ではなかったが、そのうち少しずつ馴れていった。兼寛も「私の家内などもはじめは外国風を大変嫌いましたが、私は強情ではぜったい負けなかつもりで強情を張りましたら、今では私より西洋

風がいいと云うようになりました」と夫人の変化を大変喜んで
いる。

そのころ鹿鳴会の有志（伊藤博文夫人らを中心とする貴族夫人）は「婦人慈善会」なるものを結成して、しばしば慈善バザーを催し、その収益金を兼寛らのつくった有志共立東京病院に寄付した（明治17, 18年、その寄付金で病院の看護婦教育所がつくられた）。彼女たちはかねてから兼寛らの病院設立の慈善的趣意に感動していたのである。婦人慈善会の支援はしだいに強力になり、病院を東京慈恵医院と改称して、その維持費をさらに皇室の恩賜金によるように改革した（明治20年）。そのためそれまで海軍軍医学校に共生するかたちであった兼寛らの医学校（成医会講習所）も、この病院に付属するかたちになり（東京慈恵医院医学校）、ようやく海軍から独立することになった。

このように見てくると、西欧化運動や病院・医学校の建設などに、愛生社会長・兼寛夫人の貢献も間接的とはいえやはり見逃せないのではないだろうか。

病院・医学校の建設のほかに、兼寛のもう一つの大きな業績は脚気病の原因究明とその予防法、治療法の発見であるが、この業績にたいしても兼寛夫人の寄与は無視できないのである。日露戦争勝利の翌明治39年、兼寛は欧米の視察旅行にでかけたが、目的は脚気病の予防、治療に成功したことを講演するためであった。この講演によって彼は、後年ビタミン発見の先駆者として高い評価をうけ、南極大陸に「Takaki Promontory 高木岬」の地名をのこすことになるのである。外国での発表でもあり、その原稿作成には兼寛もずいぶん神経をつかったらしい。準備のため、彼は事務長と兼寛夫人を同伴して、北海道に二週間も滞在している。その間、彼は毎日夫人を前にして講演のリハーサルをおこない、事務長はそれを速記するよ

う命ぜられた。夫人は聴講者のつもりで講演を聴き、分かり難いところや腑に落ちないところは遠慮なく質問し、兼寛はそれをこころよく取り入れ、草稿を修正していった(事務長は速記をとりながら、その情景を見てしんから羨ましいと思ったと告白している)。そのためか、すでに印刷になっているその講演は、理路整然としていて、いま読んでみても非常に分かりやすいのである。

こうしてみると南極大陸にのこる「高木岬」を顕彰するときにも、やはり兼寛夫人の内助の功も同時に想起してよいのではないだろうか。